2016 年度 武蔵大学の創造的な教育実践

1. はじめに

これまで、第Ⅰ部では「FD 活動の取組み」、第Ⅱ部では「授業評価アンケート及び教育・研究環境に関するアンケート結果」という、授業改善に関する取組みについて報告を行った。この第Ⅲ部では、建学の三理想を具現化した本学の特徴ある取組みについて報告する。

「『ゼミの武蔵』の実践」では、「自ら調べ自ら考える力ある人物」の育成を目標として実践されている本学のゼミ活動について紹介する。1 つ目は、2008 年度から正規授業となった「学部横断型課題解決プロジェクト」である。この授業は、3 学部の学生が協働して協力企業の CSR 報告書を作成するゼミナールであり、この過程を通じて学生の社会人基礎力の育成を行うものである。次に、経済学部のゼミナール活動の成果を発表する「ゼミ対抗研究発表大会」、人文学部及び社会学部で実施されているゼミナール等を通じて身につけた 4 年間の学修成果の集大成と言われる卒業論文や卒業制作に関する成果報告を行う人文学部の「卒業論文報告会」、社会学部の「シャカリキフェスティバル」を紹介する。最後に、ゼミナールはもともとアクティブ・ラーニング型ではあるが、さらに授業収録システムという ICT を活用した、新しい形態のゼミナールについて紹介する。

次の「グローバル化への取組み」では、第三次中期計画策定時に学長より示された「異文化を理解し未来を創造する教養あるグローバル市民の育成～創立 100 周年に向け原点に立ち返り、建学の三理想の継承と未来への変革を目指す～」という 6 年後に目指す大学像の実現に向けて実践しているグローバルな授業を紹介する。昨年度は、日本にいながら、ロンドン大学と武蔵大学の双方の学士号を取得することが可能となる「ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（通称 PDP)」について紹介を行ったが、今年度は、PDP 担当教員の行うゼミナールの紹介と、留学生を交えたゼミナールの紹介をする。

最後に、ご多忙の折、本報告書の作成にあたりご協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

（文責：河合 康夫）

2. ゼミの武蔵の実践

2-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部准教授　森永 雄太（運営チームリーダー）

この授業は、2008 年度に正規授業となり、今年度で足かけ 9 年目を迎えました。

2016 年度は、前学期、後学期ともに 2 つのクラスを開講しました。前学期、後学期の学部・学科別の履修者数は次のとおりとなっています。内訳をみると、前学期は（2 クラス合計）、経済学部が 17 名、人文学部が 19 名、そして社会学部が 8 名の合計 44 名、後学期は（2 クラス合計）、経済学部が 11 名、人文学部が 10 名、そして社会学部が 4 名の合計 25 名です（表 1）。

表 1　2016 年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生

	2016 年度			
	前学期	後学期		
セメスター / 学科	3 年次生	4 年次生	3 年次生	2 年次生
経済	2 名	－	－	1 名
経営	8 名	－	－	9 名
金融	7 名	1 名	－	－
英語英米文化	13 名	－	2 名	1 名
ヨーロッパ文化	4 名	－	1 名	3 名
日本・東アジア文化	2 名	－	－	3 名
社会	4 名	－	－	3 名
メディア社会	4 名	－	－	1 名
履修生合計人数	44 名	25 名		

2016 年度後学期は 1 つの時限において、一部の学部からの参加者が少なかったため、フェーズ 1 の進め方を変更しました。具体的には、学部別の活動ではなく、一部のチームを学部混合として 3 チーム作成した上で、それぞれの課題に取り組む形で実施しました。フェーズ 1 の実施方法を変更したにも関わらず、今年度もフェーズ 2 の最初では、異なる課題に取り組んだチーム間で意見の衝突や食い違いがみられました。フェーズ 2 でこのような衝突を経験しつつ乗り越えていくことで、受講生は多様な人材が参画するグループワークの難しさと意義を経験することができたと思われます。また授業運営の観点からは、フェーズ 1 の運用を工夫することで、受講生が保有している知識の違いを生み出すことが可能になることが確認できました。このことは受講生の学部や学科といった属性上の違いがない場合でも、ダイバーシティに富んだ状況を作り出せるということがわかりました。

履修生を男女比で見たものが表 2 です。前学期は男性 10 名、女性 34 名（男性比率 23%）、後学期は男性 10 名、女性 15 名（男性比率 40%）と、前学期、後学期ともに女性割合が男性を大幅に上回っています。

表 2　2016 年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生（学年・学科・性別）

	2016 年度							
	前学期		後学期					
	3 年次生		4 年次生		3 年次生		2 年次生	
性別 / 学科	男	女	男	女	男	女	男	女
経済	1 名	1 名	0 名	0 名	0 名	0 名	1 名	0 名
経営	3 名	5 名	0 名	0 名	0 名	0 名	0 名	9 名
金融	2 名	5 名	1 名	0 名	0 名	0 名	0 名	0 名
英語英米文化	1 名	12 名	0 名	0 名	2 名	0 名	0 名	1 名
ヨーロッパ文化	0 名	4 名	0 名	0 名	0 名	1 名	1 名	2 名
日本・東アジア文化	0 名	2 名	0 名	0 名	0 名	0 名	1 名	2 名
社会	2 名	2 名	0 名	0 名	0 名	0 名	3 名	0 名
メディア社会	1 名	3 名	0 名	0 名	0 名	0 名	1 名	0 名
性別合計人数	10 名	34 名	1 名	0 名	2 名	1 名	7 名	14 名
履修生合計人数	44 名		25 名					

この授業は 2 つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業の CSR 報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と社会人基礎力の自己評価能力を高めることです。

表 3 は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。通年の平均値で見ると、受講前（事前評価）と受講後（事後評価）の比較で最も伸びた要素は、働きかけ力、実行力、想像力、発信力が首位（事後－事前がそれぞれ 1.3 ポイントのプラス。ただし、それぞれの要素については 10 点満点で学生が自己評価している）となっています。一方、伸びたポイントが最も少なかったのは、同じく通年の平均値で見ると、規律性の 0 ポイントでした。

しかし、ポイントの変化で見ると、規律性は最も「伸びなかった」能力と言うことができますが、規律性は事前評価の段階で、12 項目の中で最も高かったこと（事前評価で 7.7 ポイント）にも注目しておく必要はあります。

社会人基礎力は、細かくは 12 の要素に分かれていますが、大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の 3 つのカテゴリーに分かれています。この 3 つのカテゴリーで見ると、前に踏み出す力はもともと水準が最も低かったものの、上昇幅が最も大きかったという傾向が見られます。受講生が横断ゼミの履修を通じて、前に踏み出す力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待できます。

表 3　社会人基礎力の事前・事後自己評価【2016 年度履修生】（学生による自己評価）

カテゴリー/要素		事前評価	事後評価	差異（事後 - 事前）
通年⑫要素平均		6.5	7.4	0.9
1. 前に踏み出す力（通年）		6.3	7.5	1.2
①主体性	前学期	7.1	8.1	1.0
	後学期	6.8	7.8	1.0
	通年	7.0	8.0	1.0

②働きかけ力	前学期	5.7	7.0	1.3
	後学期	5.4	6.8	1.4
	通年	5.6	6.9	1.3
③実行力	前学期	6.2	7.7	1.5
	後学期	6.1	7.2	1.1
	通年	6.2	7.5	1.3
2. 考え抜く力（通年）		6.0	6.8	0.8
④課題発見力	前学期	6.4	7.5	1.1
	後学期	6.1	7.4	1.3
	通年	6.3	7.5	1.2
⑤計画力	前学期	6.2	6.5	0.3
	後学期	6.4	6.2	-0.2
	通年	6.2	6.4	0.2
⑥創造力	前学期	5.3	6.9	1.6
	後学期	5.6	6.4	0.8
	通年	5.4	6.7	1.3
3. チームで働く力（通年）		6.9	7.7	0.8
⑦発信力	前学期	5.7	7.3	1.6
	後学期	6.2	7.2	1.0
	通年	5.9	7.2	1.3
⑧傾聴力	前学期	7.4	8.4	1.0
	後学期	7.3	7.8	0.5
	通年	7.3	8.1	0.8
⑨柔軟性	前学期	6.8	8.0	1.2
	後学期	7.4	7.8	0.4
	通年	7.0	7.9	0.9
⑩状況把握力	前学期	6.7	7.7	1.0
	後学期	6.2	7.8	1.6
	通年	6.5	7.7	1.2
⑪規律性	前学期	7.9	7.9	0.0
	後学期	7.4	7.5	0.1
	通年	7.7	7.7	0.0
⑫ストレスコントロール力	前学期	6.7	7.7	1.0
	後学期	7.1	7.8	0.7
	通年	6.8	7.8	1.0

今年度（2016 年度）に課題を提供いただき、授業に協力していただいた企業は、株式会社イシダ、株式会社岡村製作所、日本アイ・ビー・エム株式会社、水上印刷株式会社、リオン株式会社、ロート製薬株式会社の 6 社です。これらの企業の中には、CSR 活動の先進企業としてしばしばメディアに取り上げている企業や社会課題の解決を自社の戦略課題の 1 つとして位置づけ、より積極的な取り組みを行っている企業もあります。企業が試行錯誤を続けながら続けている最先端の取り組みについて自分たちなりに調べたり考察したりすることで、自分の頭で問題を設定し、自分なりの回答を導出することが可能になったと考えられます。

また今年度はプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも横断ゼミプロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や受講生間の相互フィードバックを実施してきました。今年度はメンバー間の相互フィードバック時にポジティブな面だけでなく、ネガティブな面についても行うことを強調して実施しました。受講生は、最初は仲間に対してネガティブなフィードバックを行うことに躊躇する様子がありました。しかし、すべてのフィードバックが相手の成長のために有益であること、人格ではなく行動に対してフィードバックすることでより有益なフィードバックになるというレクチャーを事前に行いました。その結果、戸惑いながらも徐々にフィードバックができるようになりました。自分の行動が周囲に思ってもみない印象を与えていることに気づいた学生もおり、自己理解を深める契機になったと思われます。

また 2016 年度も最終報告会終了後に複数のチーム合同で振り返りを行いました。学生たちは学期中、多様な学びを得たと感じていますが、その学びがどの程度周囲の人と同じでどの程度異なるのかについては深く議論してきませんでした。今回他チームの受講生と学びを共有したことで以下の効果が得られたと推察されます。まず、他者に自分の学びを宣言することで、経験からの学びがより具体的な教訓としてより明確に整理されました。類似の経験から異なる教訓を引き出している他者と議論することで物事の多様性を理解することにつながったと考えられます。

活発に意見を交わす履修生

2-2. ゼミナール対抗研究発表大会（経済学部）

経済学部准教授　田中 健太（ゼミ大会委員）

＜2016 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」について＞

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会（通称「ゼミ大会」）は、10 年以上続く「ゼミの武蔵」を代表するイベントの 1 つとなっています。本年度においては 2016 年 12 月 10 日（土）に開催し、41 チームが 8 つのブロック（経済 A、経済 B、経済 C、経営 A、経営 B、経営・金融 1、経営・金融 2、会計・経営）に分かれ、20 分間のプレゼンテーションを通して日頃の研究成果を競い合いました。

各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された 4 名の審査員が、①着眼点・結論のユニークさ、②論理一貫性、③分析・調査の妥当性、④関連する事例を検討しているか、⑤社会に必要または応用できるか、⑥聞き手を意識した発表であるか、の 6 つの観点から審査を行います。4 名の審査員のうち 2 名は本学教員ですが、他の 2 名は実務界で活躍されている本学 OB・OG です。この点もゼミ大会の特徴の 1 つといえます。今回も厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが選ばれ、それぞれ賞状・賞金が授与されました。

ゼミ大会は発表のみに注目が集まりますが、それまでの準備期間で学生にとって多面的な教育的効果が見込まれます。発表テーマに関する専門的知識の習得、深化はもちろんですが、発表の準備段階では学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力を養うことができる有用な機会を得ることができます。また企業等の実務・社会経験が豊富な OB が審査員として含まれているために、単純に学術的な正確性や理論的な理解と応用だけでなく、実社会への応用性、さらにはより広く理解を促すためのプレゼンテーション能力を要求されます。そのため、通常の講義やゼミナール活動のみでは得られない経験、学習の機会を得ることができると考えられます。

また本学のゼミ大会の大きな特色は、大会自体を学生自身が運営をすることにあります。ゼミ大会はゼミナール連合会が経済学部教員や大学スタッフ等のサポートのもと、自ら企画運営を行います。そのため、ゼミ大会での大会運営に関わった学生については、対外機関や関係者とのコミュニケーションが必要となり、大会準備の管理などを通じて、社会人として将来役立つスキルを養う場としても機能しています。

＜今年度の改善点と今後の課題について＞

今年度の改善点としては前年度の課題となっていた参加ゼミナール数を増加させるという点について、今年度のゼミ大会ではある程度、この課題を克服できたと考えられます。前年度の参加チームが 34 チームであった一方で、今年度は 41 チームの参加となり、参加チーム数が大きく増えました。この要因は参加要件の緩和を一部行ったことも要因にはあるものの、この数年間で着任された先生方にも認知が広まり、そうした先生方のゼミナールの積極的な参加が促された結果と考えられます。今後も参加ゼミ数、チーム数の維持、及び増加を引き続き努力する必要があると考えられます。

次年度の課題としては、外部の聴講者の増加を促す施策の必要性と考えられます。聴講者の大半は本学の学生となっている状況にあり、外部からの聴講者の方が来ていただかないと緊張感が薄れ、大会自体から得られる学生の刺激も薄くなってしまいます。今年度はオープンキャンパスでの模擬ゼミ発表などの企画を行い、外部へのアピールを図る工夫を行いましたが、次年度はよりそうした工夫をさらに行い、外部の方に興味を持ってもらえるような広報活動を行

っていく必要があると考えられます。

また主催するゼミナール大会の体制強化が昨年度の課題となっていましたが、今年度はゼミ大会の実施団体であるゼミナール連合会の新入生に対する呼びかけを強化し、大会運営自体に学生が興味を持ってくれるような工夫を行ってきました。しかし、ゼミ大会の活性化や大会運営に関して大きな新しい取り組みを行うことができるレベルまでには到達していないと思われ、次年度においてもより新入生や在校生に対するゼミ大会に関しての周知や積極的な参加、協力を呼び掛ける必要性があります。

ゼミ大会の様子

出場チーム、及び発表テーマ一覧

ブロック	ゼ　ミ	テ ー マ
経営 A 8603 教室	板垣 1	農業問題を解決に導く IT 技術
	伊藤（誠）1	ダイバーシティマネジメントにおける女性活用
	森永 1	職場不作法
	山﨑 1	量産型大学生
	杉本 B	中小企業のカスタマイゼーション
経営 B 8604 教室	古瀬 2	人から承諾を得るためのアプローチ
	高橋（徳）2	創業間もない企業への地域金融機関の取り組み ～金融機関は創業支援機関としての役割を果たしているのか？
	山﨑 2	オープンイノベーションと人材育成
	森永 2	円満な出戻りと組織再社会化
	伊藤（誠）2	環境投資が企業に与える影響
経営・金融 1 8702 教室	安達 1	来たれ、金融ショック！ 同一配当額を維持する会社によるポートフォリオ投資
	茶野 1	生命保険の需要構造に関する実証分析
	目時 1	経理が変わる！経理を変える！
	高橋（徳）1	クラウドファンディングとソーシャルビジネス
	高橋（由）1	内田洋行の経営分析～事業ごとの必要性～

経営・金融 2 8503 教室	安達 2	チャンスに変える、空き家問題
	神楽岡 2	不確実な経済環境における公的年金運用の戦略の提案 ～安全的な利回りを目指して～
	茶野 2	マイナス金利政策導入による生命保険会社への影響
	二階堂 2	国内未開の「ハラルコメ」～市場成長の条件とは～
	杉本 A	今後の消費動向の予測
	徳永 2	企業が成長するために経営者が考えること！　ファイナンスアプローチ
会計・経営 1201 教室	荒田 2	東芝はなぜ不正会計したのか
	海老原 2	IPO 企業の実績パフォーマンス
	目時 2	業績評価スタイルが職場の雰囲気に与える影響
	高橋（由）2	株式投資分析～スポーツと社会貢献
	下川 2	CAPM/CML を用いた合理的投資法の理論および実践的実験
経済 A 1001 教室	田中 1	途上国における貧困問題の多角的分析
	松川 1	紙パックリサイクル～紙パック回収率を上げる～
	根元 1	戦争が経済に与える影響
	吉田 A	財政支出の成長効果について
	横川 A	Brexit: EU とイギリス
経済 B 1002 教室	田中 2	地方自治体の持続可能な財政運営のための対策
	広田 2	児童福祉政策における給付方法についての財政提言
	松川 2	ごみ処理有料化
	清水 2	過労死を防ぐための長時間労働抑制政策
	鈴木（唯）2-2	ベーシックインカムの実現
経済 C 1101 教室	東郷 A	フィリピンの経済を教育的視点から考える
	伊藤（成）2	プロ野球投手のベンチマーク評価～経営効率分析の応用～
	鈴木（唯） 2-1	日本は移民を受け入れるべきか
	大野 A	日本総投資化計画～豊かな老後のために～
	河合 2	東京五輪による地方活性化

2-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部教授 新納 卓也（人文学部教務委員長）

人文学部ではすべての学科の学生に必修としている卒業論文(英語英米文化学科の英語コミュニケーション・コースの学生は英文エッセイを執筆)の成果を発表する機会として、毎年１月月末に「卒業論文報告会」を開催しています。これは、指導教授が自身の指導した卒業論文・英文エッセイから、論文の完成度や内容の独創性の観点から優れていると判断したものを推薦し、その執筆者が論文の要旨を報告するという、研究成果発表のためのイベントです。主な聴衆は、翌年度に卒業論文・英文エッセイを作成する 3 年生を中心とした在学生ですが、ご父母、外部の方々にも大学ホームページ、出身高校への案内などで告知をおこない、ご参加いただいています。

今年度は 2017 年 1 月 30 日(金)午後 1 時から 8 号館の 3 教室に学科ごとに分かれ、学科教務委員の司会のもと、以下のようなテーマで報告がなされました。報告者は学科ごとに決められた時間のなかで発表し、そのあとには必ず質疑応答の時間が用意されています。

〈英語英米文化学科(英語の題目は英語による報告)〉

Heroes and the Human Psyche

アメリカにおけるアファーマティヴ・アクションの未来像―人種差別の過去と現在から考える

ヴィクトリア朝期の家庭内で働く女性使用人の比較と考察

The Influences of the Playable Interactive Media

サンタクロース研究―アメリカのサンタクロース像形成

The Reason Why There Are Few Women Executives

〈ヨーロッパ文化学科〉

19 世紀パリの娼婦　高級娼婦ナナとリアーヌ・ド・プージィ

「68 年 5 月」とその後の社会

ドイツの歴史教育と独仏共通歴史教科書―歴史教科書で和解は可能か？

家庭環境のマイナスの影響を最小限にする公教育―『学び合い』の実践から

死者のために祈ること―ヨーロッパ中世の兄弟団

Stereotype über deutsche und japanische Dialekte: Ein Vergleich

ドイツ語完了助動詞 sein/haben の交替について―なぜ abnehmen, zunehmen は sein 支配ではないのか

Six words は小説と言えるか―小説と詩の比較、超短編小説の変遷から考える

ファッションのジャポニスム―近現代ヨーロッパの着物ブームをめぐって

時代の産物としてのアウトサイダー・アート―アール・ブリュット概念の展開と混乱

映画の中の子どもたち―善と悪の間

社会空間の思想史―近代としての郊外

〈日本・東アジア文化学科〉

松田政男『風景の死滅』に関する考察―均質化から生命の風景へ

日韓歴史認識問題　「慰安婦」問題和解に向けての考察

山東京伝の黄表紙に描かれた「形のないもの」―心と魂の表現

台湾の歴史から見る歌仔戯―台湾オペラの変遷

報告されたテーマをみると、人文学部の 3 学科が教育研究対象とする諸地域についての多様な内容が反映されていることがわかります。当学部では、卒業論文・英文エッセイを 4 年間の「学業の集大成」として位置づけ、必修とすることで、学部のディプロマ・ポリシーが目標としている「自発的な調査能力、データを整理・分析する力、総合する力、文章構成力、口頭による説明能力と現代的ツールを用いた情報伝達能力、意見交換(対話)を多角的に行って自説の客観性を高める力」を実践的に学ぶ機会を与えていますが、配付資料（レジュメ）やパワーポイントなど映像情報機器の利用によって卒業論文の内容を聴衆に伝える卒業論文報告会は、この目標の達成度をはかる良い機会にもなっています。12 月初旬の卒業論文･英文エッセイ提出後、卒業前の貴重な時間をさいてこの報告会へ向け準備を進め、工夫を凝らした報告をしてくれた 4 年生は、3 年生からの様々な質問に答えるとともに、ときにはテーマの選び方など今後卒業論文を書くうえでの後輩へのアドバイスや励ましも与えてくれました。通常、卒業論文指導は指導教授と執筆者とのあいだの個人指導やゼミナール形式のグループ指導が中心となりますが、卒業論文報告会は、学年を超えた対話が成立する貴重な学びの場となっているのです。

本報告会は、3 年生にとっては「卒業論文準備ゼミナール」の授業の一部として位置づけられています。それぞれの報告ごとにキーワードと質問・コメントをメモする用紙を提出するようにしている学科もあり、多くの学生が発表後の質疑応答にも積極的に加わります。自分が卒業論文で書こうと思っている分野や近いテーマの論文報告を聞いて、発表者に具体的な質問をすることもでき、ヒントを得たり、意欲を高めたりする 3 年生が少なくありません。

今回 3 学科すべての報告会の様子を部分的に実際に拝見することができましたが、どの学科も報告者は落ち着いて説明し、それを出席者が静聴していました。会の運営の仕方は学科ごとに特色があります。たとえば、質疑応答を学生を中心に行なっている学科がある一方で、指導教授が時に応じて論点の評価・解説や質疑応答を補助したりする学科もあり、そのスタイルや工夫は様々です。今後の検討点として、報告する 4 年生に卒業論文・英文エッセイの豊かな内容を短時間でどのようにまとめ効果的に伝えるかについての事前指導をさらに徹底すること､3 年生がより積極的に参加するよう運営上の工夫をはかることなどが考えられます。また、各学科の良い点を相互にうまく取り入れ、全体として卒業論文報告会がより充実したものになるよう改善を図りたいと考えているところです。

なお人文学部では、発表された卒業論文に、指導教授から推薦のあったものの報告会に参加できなかった学生の論文要旨も加えてまとめた『卒業論文成果報告書』を翌年度のはじめに発行しています。

卒業論文報告会の様子

2-4. シャカリキフェスティバル（社会学部）

社会学部教授　アンジェロ・イシ（シャカリキフェスティバル担当）

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作の成果を発表するための機会として 2009 年度から始まり、本年度(2016 年度)で第 8 回を迎えました。「シャカリキ」という言葉には「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味が込められています。ゼミナールごとに報告者を選出しますが、その中で競い合うというよりも、魅力的なプレゼンテーションを駆使し、多様な成果をお互いに披露しあう形で行なわれており、卒業する 4 年生を中心とするお祭りでもあります。

本年度のシャカリキフェスティバル（以下、シャカリキ）は、2017 年 1 月 30 日(月)に開催されました。設定された部会数は 9 部会で、卒業論文 20 点と卒業制作 4 点の合計 24 点の発表と質疑応答が行われました。卒業論文は、社会学科・メディア社会学科の各ゼミナールから 1 点ずつが代表として選ばれています。卒業制作については、卒業制作を選択した学生のいるゼミナールから代表が選出されています。

当日のスケジュール、および催された部会名、発表タイトルは、以下の通りです。

A 会場:卒業論文(1101 教室)

13:20～13:30		開会宣言(中西)	
13:30～14:50	部会 A1	中橋ゼミ	コスプレ専用 SNS におけるコミュニティ形成
		中西ゼミ	多様な家族の在り方とは ーレズビアンカップルへのインタビューを通じてー
		林ゼミ	成人未婚者の貧困動態―ムーバー・ステイヤー・モデルによる検討
14:50～15:00		休憩(10 分)	
15:00～16:20	部会 A2	江上ゼミ	組織における理念の重要性 ープロ野球の経営と組織の情報発信を通してー
		内藤ゼミ	県民集団が人と人を繋ぐ地域 ー福島ホープスを事例にー
		粉川ゼミ	消えゆくゲームセンターと社会
16:20～16:30		休憩(10 分)	
16:30～17:50	部会 A3	菊地ゼミ	「おもてなし」から読み解く日本社会 ー滝川クリステル「おもてなし」スピーチを踏まえてー
		千田ゼミ	災害ボランティアの功罪
		松井ゼミ	「仲介ボランティア」とは何なのか:「特定非営利活動法人 Youth for 3.11」を事例として

B 会場:卒業論文(1001 教室)

13:20～13:30		開会宣言(アンジェロ)	
13:30～14:50	部会 B1	永田ゼミ	マツコ・デラックスとは何者か？
		山下ゼミ	ソーシャルビューイングな及ぼすテレビ番組の視聴者への影響と効果について
		アンジェロゼミ	映画の中の郷土愛　～フィルムコミッション～
14:50～15:00		休憩(10 分)	
15:00～16:20	部会 B2	大屋ゼミ	若者の「楽しいアピール」 ～なぜ自撮りをするのか、なぜみせびらかすのか～
		徳永・矢田部ゼミ	社会的相互作用から考える大学生の〈自撮り〉
		南田ゼミ	デジタルとアナログが交錯する若者の音楽消費 ―カジュアルリッチ・物語消費・自己肯定から見る新たな若者像
16:20～16:30		休憩(10 分)	
16:30～17:50	部会 B3	岩崎・小田原ゼミ	差別と向き合うために、私たち若者がすべきことは何か ー在日韓国・朝鮮人をめぐる問題を事例に考えるー
		大橋ゼミ	帰化卓球選手のナショナル・アイデンティティ―中国出身の選手を事例に

C 会場:卒業制作・卒業論文(1002 教室)

13:20〜13:30		開会宣言(松本)	
13:30	部会 C1	安藤ゼミ	食農型コミュニティカフェの役割 ー西日暮里 from a & e cafe を事例にー
〜14:50		石森ゼミ	日本型エコツーリズムにみる地域住民と行政の関係性 ー埼玉県飯能市の事例よりー
		松本ゼミ	四国遍路を活用した地域活性化の取り組みについて
14:50〜15:00		休憩(10 分)	
15:00	部会 C2	アンジェロゼミ	(雑誌) Ivy of Hearts - The people who make Ikebukuro a lively place- つながりはツタのように
〜16:20		奥村ゼミ	(映像) もっと増やして 見えない人の絵本
16:20〜16:30		休憩(10 分)	
16:30	部会 C3	松本ゼミ	(映像) 若者と政治の関係性――どうすれば若者は選挙に行くか
〜17:50		永田ゼミ	(映像) セルフドキュメンタリー「かえりみち」のエッセンスをもとに

記念品贈呈式+懇親会(食堂ホール+学生ホール)

18:00〜20:00	記念品贈呈式+懇親会

シャカリキで報告する代表の選出は、それぞれのゼミナールによってやり方が異なります。学生がそれぞれの卒業論文と卒業制作を発表したうえで投票するケース、希望者が立候補するケース、あるいは教員が指定するケースがあります。代表に選ばれることは、学生にとって名誉なことです。シャカリキの代表という目標があることは、卒業論文と卒業制作に対するモチベーションを高めることにつながります。

シャカリキには、異なるゼミナール間の交流という意味合いもあります。各ゼミナールで縦割りになってしまいがちですが、シャカリキで他のゼミナールの代表の報告を聞くことで、異なるアプローチや視点を知り、広い視野を持つことにつながります。3 年生以下は、優れた報告を聞くことで、自分自身の卒業論文と卒業制作に対するヒントを獲得します。今年度は発表者によっては自分の研究内容だけでなく、卒業研究の進め方に関するアドバイスや就職活動との両立の難しさに関する体験談や反省点を報告に盛り込み、好評でした。

昨年度に続き、各ゼミナールから一人ずつシャカリキ実行委員を選出し、教員ではなく、実行委員が司会を担当する形で実施しました。発表の内容を聞きながら、フロアからの質問を促し、時間内に議論をまとめることは、簡単なことではありませんが、ジョークまで交える余裕さえ見せた司会者もいて、質疑応答も盛り上がりました。

このように、シャカリキは 4 年生にとっては優秀な卒業論文と卒業制作の発表の場としてだけでなく、3 年次からの 2 年間のゼミナールの集大成としての側面を持っており、3 年生以下にとっては自らの卒業論文と卒業制作に関する学びの場としての機能も果たしています。

シャカリキフェスティバルの様子

2-5. 授業収録システムとアクティブ・ラーニング（社会学部）
～3 日間で「ソーシャルファブリケーション」を学んだ「Web システム論」～

社会学部教授　粉川 一郎

＜ファブ社会を見据えた大学での新たな学び＞

2014 年、総務省が小さな研究会を立ち上げた。「『ファブ社会』の展望に関する検討会」。3D プリンタをはじめとするデジタルファブリケーション機器の普及は、モノづくりの考え方、あり方を変えようとしている。特にソーシャルファブリケーションと呼ばれる、ネットワークを介した個人間の情報のやり取りをもとに行われる「個人のためのモノづくり」は、産業の在り方を変え、私たちの社会そのものを変えようとしている。総務省のこの研究会は、こうした時代背景をもとに、私たちの社会の未来像を予測しようとするものだ。

社会全体がデジタル機器とネットワークの革新により大きく変化しはじめている。大学という場においても、こうした社会をリードしていく取り組みについて手をこまねいているわけにはいかない。特に本学社会学部では 2017 年度からのグローバル・データサイエンスコース開設を控え、情報をもとにした社会づくりそのものに切り込んでいこうとしている。まさに、今こそ新しい「情報」がもたらす社会変革について、授業というコンテンツの形で学生に提示していく必要がある。こうした問題意識をもとに、これまでの学部授業の枠組みを超えた新しい方法論で、この「ファブ社会」について考える授業を提供することにチャレンジした。

＜「日本で初めて」を実現するための講師、仕組み＞

本授業を具現化するにあたり、社会学部教授 奥村信幸をリーダーに、社会学部教授 粉川一郎と、外部協力者でゲスト講師をお願いする多摩大学情報社会学研究所教授 会津泉氏の 3 名でプロジェクトチームを結成した。会津泉氏は、1980 年代からパソコン通信、90 年代にはインターネットと、日本における情報ネットワーク普及に尽力してきたこの国のキーパーソンであり、「インターネットの伝道師」とも呼ばれた人物である。最近は「ファブ社会」の在り方にも強く関心を持ち、ネクストモビリティコミュニティを立ち上げるなど、この分野においても精力的な活動をしている。この強力な助っ人を得て、プロジェクトチームでは、電子メール、Skype、そしてソーシャルファブ的な取り組みとの親和性の高いコワーキングスペースでのミーティングなどを行い、プランニングを実施した。

「ファブ社会」という大きな概念では学生のイメージがわきにくいため、具体的なテーマとして今回、ネクストモビリティ（小さな交通）をとりあげた。ソーシャルファブでも盛んに作られる対象の一つが「車」であるが、こうしたモビリティに関わる製品は、「モノ」そのものを作るだけで完結せず、必ずそのモノが社会にどう受け入れられるかを考える必要がある。社会学部の授業としてこうした視点が重要と考え本テーマを採用した。また、後述するようにワークショップ的手法を多用する授業であるため、授業は後学期の集中授業とし、9 月上旬に土日を挟んだ 3 日間連続で実施した。

具体的な内容は以下のとおりである。

＜各回のテーマと学習内容＞

DAY1（9 月 8 日）
「ソーシャルファブ」から「ネクストモビリティ」へ

（1 限）　オリエンテーション　この集中講座について　狙い、など
自分／社会が本当に必要なものの発見と設計
1. ソーシャルファブとは何か：ファブラボの発生と展開、意義
2. メイカーズ革命のグローバル動向　シリコンバレー、深セン・中国アジアの動向
3. 日本でも始まっているオープンイノベーション
4. デジタルモビリティとフィジカルモビリティ
5. ＜モビリティ＞をめぐるソーシャルビジネス
6. Open Source Vehicle や Turtle Car Project （ガーナ）が示す新ソーシャルビジネス
7. 社会が求める＜小さい交通＞

（2 限～3 限）ワークショップ（アイディアソン・プレゼンの準備）
a. 江古田の町を歩いて、＜小さい交通＞の可能性を発見する
フィールドノートを書く　写真・ビデオをとる
b. 10 年後に向けて、モビリティの新しいアイディアを考える
チーム別に課題

（4 限）アイディアを形にする
レゴ　スケッチ　模造紙　絵の具　クレヨン　粘土　などで

（5 限）発表と講評（プレゼン 10 分・質疑講評 20 分を 5 グループ＋まとめ）

DAY2（9 月 9 日）
ネクストモビリティ入門：自分で必要なものを自分で創るために

（1 限）倉本さんへのインタビュー（by 会津）
「Fability Scooter」で見えてきたこと：
電動カートの自作体験を通して、自分の欲しいもの、必要なものを自分でつくることの社会的意義を語る。
1. 空を飛ぶことへの憧れ
2. 交通事故体験 から学んだこと
3. 電動スクーターとの出会い
4. 「ソーシャルファブ」のインパクト
5. ファビリティスクーターのメイキング
6. 組立・試乗・分解体験

（2 限～3 限）ワークショップ
1. パーソナルモビリティ＝実際の製品のプロトタイプ・モデルを製作する
2. 段ボール板・木材を使って、できるだけ大きく
3. DAY1 のアイディアを活用する

（4 限）製品を作って販売する会社を創る
1. 経営体制、競合分析、販売戦略、ブランディング
2. スマホ、タブレット、パソコンも使う

（5 限）発表と講評（プレゼン 10 分・質疑講評 20 分を 5 グループ＋まとめ）

DAY3（9 月 12 日）
自分の街に＜小さい交通＞システムを実現しよう

（1 限）＜小さい交通＞の事例を知る、発見する（会津）
1. なぜ＜小さい交通＞なのか
2. ＜小さい交通＞の実例たち
イギリスの電動スクーター　自然に足が動く車椅子　65 歳でつくった電動スクーター
3. ＜小さい交通＞を普及させるには

（2 限～3 限）ワークショップ
自分たちの町の 10 年後の＜小さい交通＞システムを考える
手法：ロールプレイング
以下から自分の役割を選び、その視点から町の交通システムをともにデザイン
・市長（区長）　町内会長　商店主
・サラリーマン　ワーキングマザー
・大学生　中学生
課題：
1. 多様性の実現
2. 安全と効率のバランス
3. 持続可能性：コストと維持する仕組み
4. 他の交通システムとの連携や、将来の発展にむけて

（4 限～5 限）発表と講評（プレゼン 10 分・質疑講評 20 分を 5 グループ＋まとめ）

この取り組みのポイントは何点かある。まず、実践者（障害のある自身にあわせたファブスクーターを製作した倉本氏）と触れ合う機会を確保した点。フィールドワークなど学外に出る機会を作った点。学生同士が主体的に議論し、アウトプットをつくりだし発表する機会を毎日設けた点、などがあげられる。まさにアクティブ・ラーニングの塊といった授業内容である。また、当初はビデオ教材を準備し、授業前に学生に視聴を義務づけ、そのビデオ教材の内容に基づいて議論するところから一日の授業をスタートさせることを想定していた。こうした反転授業の要素も準備をしていたが、こちらについては、後述するように部分的にしか実現をすることができなかった。

しかしながら、会津氏から「こうした内容を大学の授業として行ったのは初めてで、おそらくは日本で最初の事例ではないか」と言わしめる、かなり挑戦的な内容の授業となった。

＜授業の実践、成果と反省点＞

後学期集中授業ということもあり、受講生は当初想定よりも少ない７人にとどまった。特に、履修を希望していたにも関わらず、日程が合わず断念した学生が多くいたのが残念である。しかしながら、少人数ながら授業としてはかなり充実したものとなった。

ゲスト講師である会津氏と倉本氏からは事前に授業内容を収録したビデオ教材をご準備いただいた。夏休み明けの授業ということで学生への視聴の指示が徹底できるかが不安であったため、集中授業の１日目、２日目の１限目での視聴ということになったが、その視聴内容をもとに、学生から意見を聴取し、解説をするとともに学生に議論をさせる、いわゆる反転授業的な方法は、学生にとっても新鮮であったようで最初は戸惑いもあったが、活発な意見交換が行われた。また、ファブスクーターの試乗も刺激的な体験であったようで、各自思い思いに学内をファブスクーターで走り回っていた。

そして、実際のワークショップでは学生が熱心に議論を行うことができた。なかなか議論が前に進まない中、どういう議論のコーディネートが必要か、そこで自分がどういう役割を果たす必要があるか、こうした点を学生が身に着けていったように思われる。特に最終日に実施したロールプレイを取り入れたワークショップでは、こうした役割の持つ重要性を感じ取ってくれていたように思われる。

倉本義介氏製作のファブスクーターに試乗する学生たち

授業実施にあたり特別なガイダンスも実施した

一方で、アウトプットのレベルとしては、3 日目に最終発表された計画については既存のネクストモビリティの在り方に引っ張られる内容が多く、独創的というには物足りない部分もあった。さらなるアイディアの深化のためには、もう少し余裕のあるスケジュールで、課題や問題点について深堀りする時間も必要であったかもしれない。

しかし、総じて学生には新しい体験だったようで、授業後のコメントでは今までにない新しい授業のやり方で、非常に刺激的だった、というような意見が出ていた。

本授業は 2016 年度に試行したものであるが、その反省点を踏まえて 2017 年度に再び集中授業として実施する。2017 年度は履修学生の多様性を担保するために 3 学部の学生が履修しやすいような履修対象年次の臨時的な変更も行う。社会の未来像を学生に示し、その未来像を、次代を担う学生自身に主体的に議論をしてもらうことは、大学が社会に存在するうえで課せられた義務の一つであろう。今後も既存の枠組みにとらわれない大学らしい新しい取り組みを実践していきたい。

3. グローバル化への取組み

3-1. パラレル・ディグリー・プログラム授業について

経済学部准教授　根元 邦朗

＜はじめに＞

私が「ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（PDP)」に携わり 2 年が経過しました。グローバルな教育内容を確保するため、PDP 科目の授業内容や試験問題については、ロンドン大学が全て決定します。各科目について詳細な「Subject Guide」と「Tutor Guide」、並びに教科書が定められており、カバーしなければならないトピックが上から降ってくることになります。また、ロンドン大学が試験問題を決定するため、試験当日まで問題が分かりません。つまり、「Subject Guide」でカバーされるトピックを満遍なく教え、理解させ、予想される問題を過不足なく英語で解答できるように訓練することが必要となります。これを 15 週 30 回という非常にコンパクトな期間に渡って行わなければなりません。

本報告では、主に、(1) 如何に学生の英語力を高めることができるか、(2) 如何に学生の興味・関心を高めることができるか、(3) 如何に学生の理解度を高めることができるか、という 3 つについて触れつつ、私が授業の進行・設計で気を付けていることについて紹介します。

＜如何に学生の英語力を高めることができるか＞

上記のように、試験問題の作成・採点は全てロンドン大学で行われます。理想的には、授業中に学んだ知識を活用して、限られた時間の中で、Claim（主張）・Theory（理論的裏付け）・Evidence（実証的根拠）からなる論理的エッセイを書く能力が求められます。この能力には、(a) 文法力と高い語彙力、(b) 洗練された表現力、(c) 批判的に論理を組み立てられる能力が必要です。

PDP 履修の最低条件となっている IELTS 5.5（2 年次以降は IELTS 6.0）では、上記の論理的エッセイを書く能力にはかなり物足りません。9 月の授業開始当初は、内容に追いつくのが厳しい学生もいました。アウトプットとなるとさらに厳しく、非常に基本的な文法や英単語でさえも間違ってしまい、意味の通じる英語を書けないような学生もおります。

説得的で論理的なエッセイを書く能力を鍛えるには相当の期間と努力が必要です。わずか 15 週 30 回の授業を 4 つこなすだけではなく、学生が受け身にならずに主体的に文法力と英語力、英語表現力、論理力を磨いていかなければならないでしょう。私の授業では、(1) 簡潔・明確な英語の使用、(2) 語彙・表現の紹介、(3) 海外のニュースの活用、を実践しています。

まず、英語で授業を行うといっても、日本語で準備した講義ノートを翻訳して朗読したり、「Subject Guide」や教科書に出てくる表現をそのまま使ったりするというのではありません。重要な概念を分かりやすく噛み砕いて説明し、言い換えて繰り返し説明するように努めています。下記のように、身近な事例に引き付けるのも効果的です。説明しながら学生を注意深く観察し、分かったかどうかしつこく確認し、質問が無いかどうか尋ねて回ることも重要です。

また、大学レベルの政治学では絶対に記憶して欲しい英単語を紹介しています。例えば私が担当している IFP（基礎教育プログラム）の科目の 1 つ「Politics」で、近代国家の登場を扱うセクションにおいては、「国家主権（sovereignty)」、「戴冠（coronation)」、「要塞（fortification)」、「重火器 (artillery)」といった単語が出てきます。これらのように、高校卒業レベルでは困難ではあるが、グローバルな大学教育では重要な語彙については、逐一書き出して解説するように努めています。

さらに、私の英語だけでなく、様々な人が話す英語を聞くことも重要です。可能な限りにおいて、グローバルなニュースメディア（BBC、CNN 等）を利用して各国の政治状況や政治事件の背景について説明したり、洋画のワンシーン等を盛り込んだりしています。学生には、日本語のニュースでは取り上げられないようなグローバルなニュースを毎日チェックして、世界でどのようなことが起こっているのか常に把握しておくように促しています。

＜如何に学生の興味・関心を高めることができるか＞

上記のように、カバーしなければならないトピックが上から降ってくることになるため、グローバルな質が担保されるものの、一方で教員がトピックを取捨選択することができません。学生にとって興味･関心を持ちやすいトピックもあれば､そうでないトピックもあるようです。「好きこそ物の上手なれ」という諺にもあるように、どのようなトピックを教えるのであれ、学生の興味・関心をかきたてるような工夫が必要です。その工夫として、(1) 当該トピックの重要性、(2) 事例の紹介に努めました。

まず、「Subject Guide」に記載されている各種参考文献を取り寄せ、自分が不得手としている領域について勉強し、学生にも各トピックの重要さについて説くことができるようになりました。知らなかったことについて改めて知ることができる良い機会ともなりました。

また、日本史や日本政治等、学生にとって馴染みの深い分野から幅広く事例を織り交ぜつつ講義をすることに努めました。「Subject Guide」は良くも悪くも欧米の事例に少々偏っている感が否めません。例えば「政治参加」のセクションでは、ガンディーの独立運動やキング牧師の市民権運動を題材に、社会運動を通じた政治参加により市民は政策を変えることができるということを学びます。これらの題材はもちろん重要ですが、それらに加え、水俣病や SEALDs といった身近な題材を使うと、学生の興味・関心を引くことができたようです。

＜如何に学生の理解を高めることができるか＞

以上に加え、学生の理解を少しでも高めるべく、(1) 15 週を通じての到達目標を明確化すること、(2) 不明な点には徹底的に対応することに努めました。

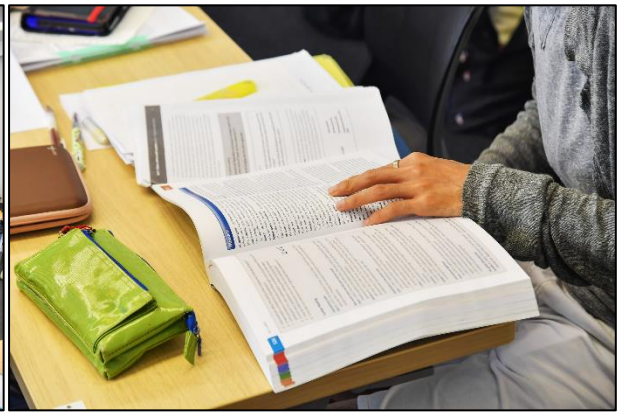
まず、15 週 30 回の授業について、リーディング課題、到達目標、リーディングをこなす際に注意すべき問題と暗記すべきキーワードを定めました。予習に慣れていない学生にとっては大変なのでしょうが、最低限理解してこなければならない重要なポイントを提示することで、効率的な予習が可能となります。振り返ると、15 週 30 回という期間に渡ってきちんと予習をこなした学生は、私の講義に予習の確認として臨むことができ、成果を挙げているようです。

さらに、関連することですが、各セクションの授業を、特に重要なポイントに焦点を絞って、構成するように心がけました。「Subject Guide」には時として枝葉末節の議論も述べられていますが、授業全体の一貫性にこだわり、授業の冒頭において当該セクションで一番重要な話題を big picture として提示し、それから各論に移っていくように心がけました。教員自身が、「Subject Guide」を深く読み込み、本筋と枝葉末節とを適切に把握しなければなりません。

また、授業中分からないことや、「Subject Guide」で不明だったことについて、徹底的に対応することに努めました。どんなことでも、いつでも、なるべく教室内で質問しやすい雰囲気を作り上げることに心がけました。授業中に質問するのが気恥ずかしかったり、億劫に感じたりする学生に対しては、email でいつでも質問をするように繰り返して説きました。在室中はオフィスのドアをいつでも開けておくことで、オフィスに入ってきやすいような環境を整えました。

＜おわりに＞

以上、学生の英語力、興味・関心、理解度という 3 つの点に焦点を絞り、私の工夫について紹介してきました。やはり、「満遍なく教え、理解させ、予想される問題を過不足なく英語で解答できるように訓練する」という PDP 科目の特色上、授業の進行・設計で気を付けなければならない点が多くあります。発展途上にあるプログラムですから、来年はまた違った手法を取り入れているかもしれません。何か新しい課題を見つけた時は、その都度切り替えていくというような柔軟な姿勢も必要であると思われます。



PDP 授業の様子

3-2. 留学生との協働によるドイツ語教育（人文学部）

人文学部教授　黒田 享

＜実践的運用力を重視したドイツ語教育の現状＞

今日、日常生活での運用能力を培う外国語教育の重要性は論をまたない。高度な内容が含まれる外国語文献を、時間をかけて読み解く能力は社会の様々な場で必要であるし、そうした能力を伝える教育の意義はこれからも否定されることはないだろう。それでも現代社会はすでに高度にグローバル化が進んでしまっており、日本語以外の様々な言語を母語とする人々との交流は我々の日常の一部である。また、日本人が国外に足を運ぶハードルも極めて低くなっている。こうした現実に触れていれば、日常的な対人コミュニケーションの場での応用を重視する実践的外国語教育の必要性を意識するのは自然なことだ。

実践的外国語運用能力は日本以外の地域で社会的に活躍しようとする際には不可欠の能力であり、それを有する人材は将来においても必要とされ続けることだろう。なので、実践的外国語教育は社会の要請（そしてそれを背景とした学生のニーズ）に応えるものであると言える。従来は筆記試験形式に重きが置かれることが多かった外国語検定試験も、近年は入門レベルから口述試験を課すものが増えつつある。このことも実践的運用能力を重視した外国語能力観が広まってきていることの証左だと考えられる。

本学の外国語教育においても実践的教育にかなりのウェイトが置かれている。筆者は人文学部ヨーロッパ文化学科学生を対象とする外国語科目としてのドイツ語授業と、ドイツ語に関わる専門科目に携わっているが、どちらについてもネイティブスピーカー教員担当の実践的運用能力を高める授業が多く開設されている。夏季・春季の授業が行われない期間にはドイツ各地に実際に赴き、現地で生活しながらドイツ語を学習する現地実習授業も設けられ、例年多くの学生が参加する。また、ドイツの提携大学では毎年数名の学生が１年間の交換留学生として学んでいる。こうした機会を活用することにより、極めて高い実践的ドイツ語運用能力を身につけることが可能である。

＜擬似留学体験の効果＞

さて、実践的に外国語を学ぶために最も確実で時間がかからない方法は、やはり学ぶ言語が話されている土地に行ってその言語を母語話者との日常的なコミュニケーションのツールとして使用してみることだ。いわゆる（短期にせよ長期にせよ）「留学」である。上述のように、本学でも現地実習授業や交換留学の形でそうした機会を提供している。

もっとも、留学には様々な障害がある。すぐに思い浮かぶのは経済的な障害だが、大学生が留学をためらう理由はそれだけではない。留学の経済的ハードルが現代よりもはるかに高かった昭和期は、まず日本人だけに囲まれる環境でドイツ語を学んだ後、現地に留学することが普通だった。その際、留学生は大きなカルチャーショックにさらされることも多かったのだが、当時はそれはむしろ「貴重な体験」としてポジティブに捉えられていたように思う。

だが、外国での生活に対する不安から留学をためらう学生も多かった。また、現地到着後のカルチャーショックが学習不振につながるケースを見ることも多くあった。武蔵大学でも、入学当初は留学を目指していたものの、外国での生活に対する不安（これは特に長期留学の場合にあてはまる）から意気込みが後退してしまう場合が多いと感じる。留学準備指導を充実して現地での生活に対する不安を和らげることが学生の留学意欲を高める（あるいは保つ）ために

効果があるのではないか。

留学準備指導はすでに様々な形式で行われているが、筆者は留学への不安を減らすためには擬似的な留学体験が特に有効だと考えている。日本国内で外国の生活環境を完全に再現することは難しいが、それでも大学という環境は一般社会に比べ、かなり現実に近い外国生活体験の場を提供できる。とりわけ、留学生と日本人学生の交流を重視したい。何よりも自分が留学することになる土地をよく知る人々との関わりが不安の程度を下げるためには重要となるだろう。その際、学生同士であれば心理的距離も近く、気さくに関わることができるし、受ける評価を気にすることもないため、より関わりやすい。本学ではグローバル教育センターの Musashi Communication Village で各国からの留学生との交流の場が提供され、擬似的な海外生活体験が可能になっている。

筆者自身は、不定期ではあるが、これまで担当する授業の場で留学生との交流の機会提供を試みてきた。筆者の授業は全て言語としてのドイツ語に関係するので、これにより内容の充実と外国人学生との交流促進を同時に図ることができる。もっとも、ドイツ語は大学で初めて学習する学生がほとんどであるので、日本語を介した意思疎通が欠かせない。これは特に 1 年次生向け授業にあてはまるが、上級生向け科目であっても段階的な配慮を行なっている。

日本での生活しか知らない大学生が海外生活に対して不安を抱くのは当然のことである。また、家族が心配するケースも多い。この段階で留学を躊躇する学生を「留学に向かない」と切り捨てるのでなく、十分にサポートしてエンカレッジできればと思う。

＜授業における留学生との協働の具体例＞

ここでは、筆者が担当する人文学部学生を対象とする授業での留学生との協働の様子を紹介したい。2016 年 1 月 19 日は筆者が担当するドイツ語クラスの最終回であり、全体のまとめ的な内容であったため計画に若干余裕ができた。そこで、提携校として留学生の交換を行なっているドイツ・ハレ大学からの留学生に短いゲストスピーチを依頼した。ハレ大学についての紹介のほか、大学生活一般、大学生の生活、また、武蔵大学へ留学することになったきっかけについて語ってもらった。1 年間の授業の最後ということもあり、ドイツ語で質問を試みる学生も現れ、活発な交流となった。

このほか、10 月には提携校であるパッサウ大学から国際交流調整官が来訪した際に、同大学での勉学について説明してもらった。過年度においては専門ゼミで協力してもらったこともある。

ドイツでの大学生活について説明する交換留学生